千すじの黒髪

わが愛の與謝野晶子

田辺聖子

千すじの黒髪

わが愛の與謝野晶子

田辺聖子

文藝春秋

© 1972 Seiko Tanabe Printed in Japan

千すじの黒髪
わが愛の與謝野晶子
一九七二年二月十五日第一刷
一九七七年五月二十日第九刷
定価九五〇円

著者 田辺聖子

発行者 樫原雅春
発行所 株式会社 文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話 (〇三) 二六五一一二一一

印刷 図書印刷
製本 大口製本

万一落丁乱丁の場合はお取替え致します

千すじの黒髪

わが愛の與謝野晶子

アート・ディレクター　栗屋　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

千すじの黒髪

わが愛の與謝野晶子

ひとすぢにあやなく君が指おちてみだれなむとす夜の黒髪

晶子「小扇」

海鳴り

一

與謝野晶子の歌を、私がはじめて目にしたのは、旧制高等女学校の生徒だった頃である。国語の教科書に載った彼女の歌は、きわめて華麗、清艶で、画を見るように印象のはっきりした叙景歌だった。（もちろん、戦時中のこととて、彼女の真本領ともいうべき、初期の恋愛歌は、学生の教科書ばかりでなく、一般の印刷物からも追放せられていた）

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき

磐梯の山をとどろと鳴らし来てみづうみに入る白き横雨

夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり

晶子は與謝蕪村を好んだので、その手法を作品に採り入れたことがわかるが、情景描写もさりながら、一気に言い下すリズムの美しさは無類である。

女学校の国語の教科書というのは、たいてい保守的な桂園派の歌の次に、鐵幹と晶子の歌がくることになっている。だから「明星派」は清新潑剌たる印象がより強い。私は彼女の歌に大いに関心を持ち、かつ好きになった。そういえば、このほか人口に膾炙されている、

鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな

や、

ほととぎす治承寿永のおん国母三十にして経よます寺

あるいはまた、

海恋し潮の遠鳴りかぞへては少女となりし父母の家

などという口あたりのいい、また、目で読んでも耳で聴いても美しい歌は、少女、というより昔の女学生好みの歌なのであろう。

私はそれによって晶子の歌を更に知ろうとした。

そうして、彼女の歌集をみつけて手に入れたのであるが、それは女学校の図書室ではなかった気がする。当時もう図書室は、救急訓練か何かの課外活動にあてられていて、戦時下の女学生として繃帯の巻きかたや止血法、人工呼吸、副木の当てかたなどの講習をうける場所であった気もする。のちには全校生徒が烈日炎天下の校庭で一せいに実地訓練し、担架を担いで走ったりしていた。そんなわけですでに図書室は机も椅子も取り払われ、蔵書も見なかったように思う。多分、家の近くの古本屋で買い求めたにちがいない。なにげなくひらいた私は、あまりにも教科書の歌とはちがう歌にとまどった。

彼女の第一歌集「みだれ髪」は、元来、かなり難解なものである。おそらく女学生の私には読み下しても意味の通ぜぬ歌が多くて、読みとばした作品が多かったであろう。しかしそれでも、私はたちまち青春と恋と大胆放恣な官能の息吹きに眩惑され、歌の中に引きこまれた。

あまりにもけざやかな色彩と音がそこにあった。その色も、臙脂、紫と、心をそそる魔性の色である。草花はことごとく毒を持ち、鐘の音は傲岸不遜に鳴りひびき、恋の息吹きに血はしたたり、狂せる女は哄笑しどよめくのである。

なんという豊かな、おそろしい、拡がりゆく世界。なだれおちる言葉。なんでもない言葉が、晶子の唇から洩れると、たちまち狂気の炎ともえ、身をもんですすり泣くかなしみと化し、ねたみ、もだえ、苦悩の極限から、かぎりない歓喜へ昇華してしまう、なんという美しい変幻自在。

やは肌のあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君

乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬここなる花の紅ぞ濃き

春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手にさぐらせぬ

私はそのとき、活字の一字一字が影を持ち、風をおこすような感動に包まれた。難解で知られた冒頭の歌——

夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ

血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど春を行く人神おとしめな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

などという歌まで、私には難解さゆえに、まばゆいまで衝撃的な作品に思われた。晦渋であればあるほど、私には眩惑的な美にみちていた。私は歌の意味を解して衝撃をうけたとはいいがたい。言葉に酩酊し、その言葉を大胆自在にえらびとる精神の跳躍ぶりに驚倒したのだった。

私には——というより私たちの生きていたその時代では、精神がのびのびと解放されるということはあり得なかった。そうして、若者たちは、自分らが萎靡しているとも思わない。生まれたときから、戦争は潮騒のようにたえず遠鳴りつづけていたからだった。

おとなたちはしたりげにいった、あれをしてはいけない、これをしてはならぬ。戦争だから——戦争がすんだら——すむときがあるの？——いや、もっと大きな戦争になる。

一つの戦争（対中国の戦争）が終結せぬままにまた一つの戦争が重なった。それでも私たち女学生は、世の中というものはそういうものなのだ、と思う。——しかし、いつのまにか見わたせば、リボンもチョコレートも、友禅の振袖も、押花のしおりも中原淳一の絵のついた便箋も、みな消滅して、あたりは殺伐とした兵士のカーキ色一色になっているではないか。音楽も色も匂いもない世界であった。つかれきって困憊した人ばかりが、足を引きずって歩いている。

歌集「みだれ髪」が出たのは明治三十四年であるが、その時代と、昭和十七八年の戦時下日本を比較して、いずれが閉鎖的で因循姑息で暗黒な時代であったかといえば、私はあとの方だと思うものである。明治三十年代というのは清新な文学運動が行なわれ、明治ロマンチ

シズムが湧きおこった盛りの春であった。が、敗戦前の日本は、もはや何ものも人の心に生まれなかった。あるのは頭上低く圧しつづける陰鬱な、まがまがしい絶望であった。日本という腫瘍はいまや破れそうな膿をはらんで紫色に腫れあがっていた。

どっちをむいてもこだまは返らなかった。しかし晶子の歌は、それをつき抜けた彼方に、空があることを教えてくれた。

後年の晶子は、それら初期の歌を否定している。彼女の意にみたぬ初期の歌ばかりが人口に膾炙し、後期の歌をかえりみられること少ないのを、恥じ、悲しんでいる。

作歌生活四十年、五万首をこえる歌をつくった彼女は、この時代の作をみずから「嘘の時代」とよび、後年大成した自分を「嘘からでた真実」といっている。そして晩年の作をこそ「世に問う自信がある」といっている。何となれば彼女の文学的出発は、島崎藤村・薄田泣菫の模倣からであり、初期の作品群はまさにそれ以外の何ものでもないという——。

けれども、「模倣」にすぎざる作もあることは否めぬものの、その中の或る作品が示す、重く厚く甘美なリアリティを、どうして「嘘」とよび得よう。もしそれが嘘ばかりのつくりごと、まねごとであるならば、それを踏み台にしてさらに伸びていった中期の歌のしたたかな真実の手ごたえを、何とよぼう。じつをいえば、今の私は、晶子が中年になってからの歌を最も愛するものなのである。

私の二十代は戦後の忽忙のうちにすぎてしまった。四面、焼土で、本屋もなく、私はその頃、女子専門学校の国文科生徒だったので、女専の図書室の本をしきりに借り出していた。

この学校は幸い、戦時中、空襲にあわなかったのである。私は国文科のくせに、外国の名作古典の翻訳ばかり読んでいた。家は終戦二ヶ月前に空襲で焼け、父は十二月に死に、母と弟妹、私との四人暮らしで、どうやって食いつないでいたか、おぼえぬほどの、食うや食わずの生活である。そういう時だったのでかえって、いたずらに老大で冗長な外国小説を読みかじっているほうが気がまぎれたのではあるまいか。トルストイもドストエフスキーもそのころにかじった。ほとんど詩歌には無縁だった。詩歌というものは、私の場合、ゆとりある心と身体状況の中でしか、味わえないものだった。

晶子の歌のほうは、戦後は却って世に喧伝され、俗流の人間性解放論に乗じられて、「やは肌の……」や「ちからある乳を手にさぐらせぬ」の歌はほとんどの人の知るところになっていた。戦時中の抑圧の反動で、ちまたにはいちどきにエロ出版物、エロ文化の、真たると似非たるとを問わず溢れていたから、晶子の歌もまた、その中に捲きこまれて、さかしらに利用され、瀆されていった。

いまは、晶子の「やは肌の……」の歌も、それ自体として読めば、驚倒する人も、衝撃をうける人もないであろう。いまは性そのものに関してあまりにもあからさまな姿が白日に曝されている時代だから——。ただ、彼女の生きた時代と照らしあわせて読む、という手間のかかることをしなければ、つまり考証的に読むときにしか、人はおどろかないような時代になった。

これを以て晶子を、ただ時代の差においての先覚者にすぎぬという人があるが、それは皮

相な見方のようにも思われる。のちの世に照らして、時代背景の中でのみ生命をたもつものでなく、やはりいつまでも生きる真実なのである。それは彼女の生涯を通じての歌を見たときにわかる。彼女が三十になり、四十になったときの歌とひびきあい、喚(よ)びあう歌なのである。

私は、三十の年になってから、偶然、物を書くという仕事を持つようになった。さまざまな人にも逢い、別れ、小さな運命をいくつか経て、思いのほかの結婚もしたりした。私はセーラー服の女学生から四十近い女になっていた。

晶子の初期の歌は、やはり色なお褪せず、蠱惑的だった。けれどもあの高らかな恋愛肯定の凱歌の次にくる、不気味な呻吟と怨念のひびきをもつ歌はこれはどうしたことだろう。

すさまじきものの中にも入れつべき恋ざめ男恋ざめ女

たえず来て石の槌もて胸をうつ強きこころの君におもはる

老いぬらん去年(こぞ)一昨年(をととし)の唯ごとのそのなつかしさ極りもなし

死ぬばかり若き心をまどはせしその世の恋もこのごと終る

晶子が三十代のころの歌である。恋の歌が女学生を秘密めかしい熱狂に誘ったように、三十代の歌は、三十代の私の心を濡らした。

こほろぎや男をんなの文(ふみ)がらの多きが中にうづもれてきく

なども、なんと年増女ごのみの歌であろうか。青春がさったとはいえ、まだみずからはべつの命が生まれつつあることを知る、そしてそれは形の上の若さとはべつの命の華やぎであり、照り映えである。女がそれを知る年頃があるのである。

その華やぎは女の上にあからさまにあらわれず、沈潜して重苦しくたゆたい、くぐもる。その吐息がためられて思わず、ほうっと洩れるように晶子はうたう。重い華やぎの年頃の命をうたう。それは四十に近き日の歌である。

三十路(みそぢ)をば越していよいよみづからの愛(め)づべきを知りくろ髪を梳く

人の身にあるまじきまでたわわなる薔薇と思へどわが心地する

つまり晶子の歌は、若き日に通りすぎる宿駅の一つではなく、生涯つきあえる歌なのかも知れなかった。六十歳の晶子が「世に問う自信あり」といった晩年の枯淡な叙景歌は、六十

になった時の私には、こよない慰めとたのしみになるかもしれぬ。

若い頃、私は、美しい歌を詠んだ晶子は、美しい人であるように思っていた。

しかしこの頃、晶子研究が進んで、いくつかの写真が世に知られるようになったが、それでみると、かならずしも彼女は世のつねの美人ではない。

男のような、がっしりと張った意志の強そうな顎。

たくましい、太い眉。

厚い、いかめしい肩。胸は厚くたけたかく、着物の衿はどちらかというとルーズにはだけ(それは関西風な着こなしで、ゆるくみえて、腰もとで締める着付けなのであるが)、多すぎる漆黒の髪は、たいていの写真によれば、歌集の題のごとく「みだれ髪」なのである。剛く、強く、太く長い髪は、つかねてもつかねても、彼女の情熱のように手に余るのであろうか。

しかし私は、彼女の顔は、やはり特異な美しさがみなぎっていると思う。叡知を秘めて強く輝やく、大きな双の瞳。男のそれのようなしっかりした鼻梁。ややうけぐちの唇は、両端が下へ引きしまって、なみなみならぬ彼女の意志力を暗示している。それは彼女の生涯を通じて変っていない、非凡な表情である。

おのれの才をたのみ、おのれの情熱のふかきをわれともてあまし、ふかく人生を生きる女の表情である。

のちに彼女の息子の嫁となった、小林政治氏の三女、與謝野迪子氏は、小学生の頃に四十代の晶子を見て、

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.